



## レフェリーレポート

2015年11月10日

B級審判員 篠田政明

### <緒言>

ハンドボールの審判員としてレフェリングを続けてくる中で、多くの教えを頂いてきた。今回は特定の大会での協議に限らず、それまでの自分には全く考えられなかった内容に関して学んだことを、以下に記載していきたいと考える。



### <学び>

#### ①ハンドボール観を發揮することの重要性（判定技術論に固執してはならない）

ハンドボールはスピーディでコンタクトもありエキサイティングなスポーツであり、その面白さをいかに表現し發揮していくかが審判員の目的・目標と言える。その中で「いい判定をする」という判定技術論の協議などが審判員の絶対的な目的・目標のように感じられており、「選手たちにどのようなハンドボールを發揮させていくか」という点にスポットが当てられてないこともしばしばあると思われる。否定はしないが、審判員は目的・目標は相撲の行司のようにただ判定するのではなく、ハンドボールの面白さをコート上で發揮させることが目的・目標であると考ええる。

## ハンドボール観の發揮 > 判定技術論

※ハンドボール観については「レフェリーハンドブック」序文を参照

#### ②難解な判定については基本的にルールブックを見て解釈をする

判定の内容の議論については①をふまえた後に考えていくべきだと考える。判定については「〇〇さんが、この判定は〇〇と言っていたから、こういう判定でいいんですね？」のような会話がよく耳にされる。確かにキャリアのある審判員の発言は非常に有用で参考になる点が多く、私自身も多くを学ばせて頂いた。しかし、判定の解釈の最終的な定義は「ルールブック」に従うべきであると考ええる。審判員の意見をふまえて単に鵜呑みするだけでなく、自分自身で考え、さらにルールブックの該当部分を探り研究していく姿勢こそが審判員としての求められる姿ではないかと考える。経験上、自分自身で曖昧であった判定内容もこの方法により鮮明となり、次のレフェリングの自信になった。是非、多くの審判員にも勧めたい内容である。

## ルールブックをさわる習慣が大事

※ルールブックは現在 HP から入手することが可能

### ③選手のパフォーマンスを最大限発揮させる

なんとなくフリースローの判定をして、ゲームを途切れさせるジャッジを目にすることがある。正面を取った正当なディフェンスが「ピッ！」というフリースローで終了する場面である。ハンドボールではラフプレーは認められていないがハードプレー（正当な位置でのコンタクトなど）は認められており、それが醍醐味であると言える。いわゆる DF 評価である。それによって、スピーディな展開が生まれゲームがエキサイティングとなる。このような DF 評価でも言えるが、各選手個人の能力（カットインの素早さ、ポストの正確な位置取り、DF 時の正面での位置取りのうまさやボールカットの技術など）を審判員が見極め、試合の中で最大限発揮させてゲームをエキサイティングにしていくことこそ、審判員がすべきことであると考え。よって、審判員がアップからチームの良さを観察していき、ゲームの中でいかに判定を下すということを目的とするのではなく、いかに選手の良いところを発揮させるかを目的とすることが重要で、それによって観衆がハンドボールを見て楽しい、面白いと感じるのではないかと考える。ただし、ラフプレーを放置してそのまま激しい試合を展開していくことを勧めているわけではないため、その点は誤解のないようにして頂きたい。



#### 【審判時の優先順位としての考え方】

**選手のパフォーマンス発揮のサポート > 判定を下す**

<終わりに>

緒言にも記載したように、今回の内容は私自身にとって大きく意識を変えさせられた内容を中心に記載しました。記載の内容も全てが正しいものとは限らないため、読んだ上で皆さん自身の考えと照らし合わせていただき、このレポートが審判員同士の活発な議論のきっかけになれば幸いです。